

令和 6 年 5 月 9 日現在

機関番号：56203

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2023

課題番号：20K21978

研究課題名（和文）戦時言論統制下における小説表現の創出についての研究 太宰治を中心に

研究課題名（英文）A Study on the Creation of Novel Expressions under Wartime Censorship : Focusing on Osamu Dazai

研究代表者

野口 尚志 (Noguchi, Naoshi)

香川高等専門学校・一般教育科（高松キャンパス）・講師

研究者番号：70882520

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：太宰治の中期作品の特徴として、動物の比喻と女性の一人称の語りを挙げるができる。これは前期にはほとんど見られず、中期に増加する。本研究は言論統制と文学表現の関係を追究しようとしたものだが、その過程で、検閲による処分を避けつつ、戦時体制からの疎外を表現するために、動物と女性が作品の中で用いられている可能性が浮上してきた。動物と女性を用いることによって、戦時体制の中でもとりわけ徴兵制が作り出す疎外の問題を語っていたのが中期の太宰作品だったのではないかと考えられる。こうした戦争への単純な賛否とはことなる作品読解の視点を追究した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦時下の文学作品は戦争への賛否以外にどのような視点で読むことができるのか、そのことを考えるために言論統制が生み出す文学表現について追及した。太宰治の作品からは、戦時体制からの疎外を語る作品の様相を見とることができる。これには戦争への批判の側面と、戦時体制への協力を兵士とは異なる形で行いたいという願望の表れの面とがある。この両極が同時に存在する視点は学界に提示する意義のあるものと考えられる。また、こうした作品を戦時下で発表する作家の行動からは、国家体制と国民との関係についての問いかけを得ることができるだろう。

研究成果の概要（英文）：The characteristics of Osamu Dazai's mid-career works include the extensive use of animal metaphors and first-person narratives from female perspectives. These elements are scarcely found in his early works but become more prevalent in his mid-career. While this study aimed to explore the relationship between censorship and literary expression, it surfaced the possibility that animals and women were employed in his works to express alienation from the wartime regime, while avoiding punitive measures from censorship. By utilizing animals and women, it is speculated that Dazai's mid-career works addressed the issue of alienation, particularly stemming from conscription during wartime. This investigation delved into a nuanced interpretation of his works, diverging from a simplistic stance of either endorsing or opposing war.

研究分野：日本近代文学

キーワード：太宰治 アジア・太平洋戦争 言論統制 文学者と社会 思想戦

## 1. 研究開始当初の背景

日中戦争開始後の戦時下において、言論統制によって作家は委縮し、文学も多様性を失ったという文学史上の常識がある。日中戦争開始後、戦争の遂行の上で文学は無用のものという認識が広がるにつれて、文壇では文学者の社会性が大きなテーマとなっていた。たとえば、多くの作家が戦地に赴き、軍隊を称賛する作品を書いた。戦時体制への協力が文学者の社会性であったのである。このように、文学者の社会性が一義的に決定され、一方で戦争に非協力的な者を排除するという文壇の自主規制は、言論統制の内面化であったといえる。文学史では、その結果、この時期の文学作品は戦後と比べて多様性もなく、劣化しているとされてきた。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、上記のような文学史上の常識を問うことである。表現に制約が加えられたからこそ、制約を潜り抜けようと表現に工夫をこらす作家もいたのである。言論統制は表現を圧殺するばかりか、その逆の結果に結びつくこともある。その具体的な方法や、その結果としての表現の様相を、戦時下でも作品を発表し続けた作家である太宰治を中心として明らかにしようとする。

## 3. 研究の方法

言論統制下で表現の制約があったことは事実である。そのために、本研究では以下の二点を中心的な視座とした。「笑い」の風刺性に注目する。ユーモアによって真意を覆い隠しながら発揮される「笑い」の批評性の内実を問うのである。戦時のジェンダー論的な言説と作品の関係である。戦時の男性性は戦場の兵隊に代表・象徴されている。そうした男性性の規範から外れた人物を描くことは、それ自体が既に戦争がつくりだす社会への批評である。これらの点から制約を乗り越える表現をどのように生み出しているのかを見出していく。

## 4. 研究成果

太宰治の中期作品の特徴として、動物を用いた比喩と女性の一人称の語りを挙げることができる。これは前期にはほとんど見られず、中期に増加する。本研究は言論統制と文学表現の関係を追究しようとしたものだが、その過程で、検閲による処分を避けつつ、戦時体制からの疎外を表現するために、動物と女性が作品の中で用いられている可能性が浮上してきた。明らかになってきたのは具体的に以下のような点である。

太宰治の中期の活動が始まるとされる昭和12年は、日中戦争の勃発の年でもある。近年の研究では、戦時下の社会において戦場の兵士が最も理想的な男性像となっていたことが指摘されている。国家への貢献という点と、戦地での経験を通じた人間としての成長という点において、理想的な大人の男性像が戦場の兵士であった。一方で、太宰がこの時期に描いた男性は多くが作家や芸術家であるが、いずれも戦場に行くことのない人物である。これには太宰自身が徴兵検査で丙種であったことも関係しているかもしれない。そうした人物がしばしば動物に譬えられる。言葉を発することのできない鴉であったり、他の犬から排除されてしまう見栄えのしない犬であったりする。つまり、戦時の基準による一人前の大人の男性像に当てはまらない人物が、人間の存在である動物にされている。女性の一人語り作品が書かれ始めるのもこれと関係していると思われる。従来の研究でも、女性の語り手は男性のつくる社会への異議申し立てを行う存在とされてきた。その異議申し立ては、兵士こそが男性性を兼ね備えるという価値観への異議という面が大きかったのではないか。つまり、理想の男性像から外れた存在を女性に仮託して表象する意図があったのである。

こうした作品の例の一つが「畜犬談」(1939年)である。この作品については「笑い」の要素が特に論じられてきた。いったい何を笑わせ、笑わせることで何を覆い隠していたのが問題である。この作品では作家(芸術家)が弱い者の味方として生きるという存在意義が示される。作中、飼い犬と相似の存在として描かれる作家が、はじめその犬に同族嫌悪を覚えながらも、最終的に犬たちのコミュニティに馴染めないその犬と自分とを重ね、同時に自分をその犬のような弱い者の味方とすることでこの世に存在することを自ら許す。国家への貢献と男性性という点で当時の人間社会から疎外された作家が、犬の姿を通して新たな存在意義を獲得するのである。つまり、この作品は弱い男の姿を笑わせながら、その弱さこそが戦時下にも意義のある価値であることを発信しようとしている。

ほぼ同時期に発表された「皮膚と心」は、女性を主人公としてかなり近い問題を扱っている。主人公の女性は、自分の唯一の取り柄だと思っていた肌の美しさを皮膚病に罹ることによって失う。しかしその体験を通じて、いわば仕方なく結婚した夫(この夫も芸術家であり、強い男性性という点を備えていない人物として描かれる)に助けられ、もとの肌を取り戻すこと

で、夫を見直す。それと同時に強い男を求めてしまう自分も変化する。これも、戦場の兵士に代表される男性性を相対化していることは間違いない。

一方、「十二月八日」(1942年)は異なる角度から戦争に熱狂する国民を相対化している。この作品も女性を語り手としているが、それまでの同種の作品と異なるのは、男性がつくる価値観の相対化という点はそれほど色濃くないという点である。米英と開戦した日を表題とする作品だが、無邪気に戦争の勝利を信じようとしている。そこでは男性性は批判的に語られるものではなく、むしろ女性までもがその価値観を内面化し終えた世界に見える。だが、そこで繰り返される戦争の勝利に対する「信仰」という言葉は微妙である。戦争の勝利を信じることを「信仰」と呼ぶ場合、そこには盲目的信頼という含意が生じるだろう。敢えて客観性を捨てて戦争の勝利の「信仰」に身をゆだねる主人公と、その夫(この夫も作家である)が描かれている。おそらく、それを描くこと自体が、戦時下の国民の姿を突き放して見るための方法であったはずだ。

ただし、これには別の補助線が必要で、「十二月八日」を収録した『女性』(1942年)に言及する必要があるだろう。『女性』は女性を語り手とする作品を集めた短篇集である。「十二月八日」は巻頭に収録されているが、巻末に収録されているのが「待つ」という短い作品である。『女性』収録作で米英開戦後に書かれているのはこの二作のみである。「十二月八日」では戦争の勝利を「信仰」する女性と作家(芸術家)、「待つ」では対象が何かはわからないがとにかく待ち続けている女性を描いている。「信仰」が戦争の勝利への盲目的信頼の態度であるなら、「待つ」という行為はその正反対で、「待つ」対象がたとえば戦争の勝利が本当にやってくるのか否かの疑念を常に持ち続ける態度である。作中で何を待っているのか明確には示されないが、しかし、待ち続ける「私」を「あなた」(読者)は見かけるはずだと語って作品は終わる。この短篇集は最初に「信仰」を提示しておいてそれを攪乱する作品で閉じられていることになる。

先述の「畜犬談」「皮膚と心」のような日中戦争開戦後の作品と比べて、「十二月八日」「待つ」のような対米英戦争開戦後の作品は、戦時体制への向き合い方がより複雑になっていると言える。前者では徴兵制を主とする戦時体制への疑問が表れているが、後者はもはやそうした疑問は薄れ、「十二月八日」のように戦争を遂行する国家に忠実に従う国民の姿が前面に出ている。だが、そうした国民的心情に全面的に乗ることはできない一部の国民の姿も太宰作品には揺曳しており、それが「待つ」のような作品で目立たぬ形で提示されている。

おそらく日中戦争から対米英戦争にかけての太宰作品は、男性性を強調する徴兵制と兵士の表象を中心とする戦時体制への違和感から始まり、その違和感を芯に持ち続けてはいる。だが、対米英開戦に至ると、その違和感は徴兵制のような戦時体制の中の具体相に向くのではなく、無邪気に戦争を下支えしようとする国民的心情に向けられていく。それが、片や「十二月八日」になり、一方では「待つ」のような作品として現れる。戦時下の太宰作品にはこのような見取り図を描くことができると思われるのである。

中期の太宰作品は、動物と女性を用いることによって、検閲の対象となることを回避しながら、戦時体制の中でもとりわけ徴兵制がつくり出す疎外の問題を語っていた。この問題は変質しながら戦時下の作品の底流にあり、徐々に国民的心情の相対化の方へ向かう。ここには戦争への単純な賛否とも異なる問題である。むしろ賛否で割り切ることのできない問題を比喻や仮託表現を通じて何とか描き出そうとしている。この点は他の戦時作品を考える上でも重要な視点であると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 野口尚志
2. 発表標題 女性独白体 のなかの「十二月八日」の位置 国民の均質化 という観点から
3. 学会等名 太宰治スタディーズの会例会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------